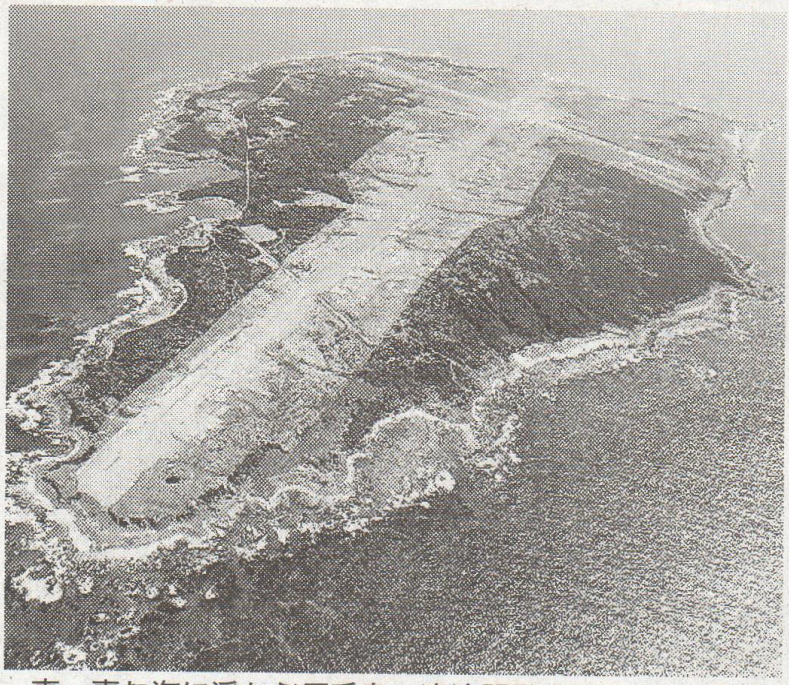
国有地売却 開発の契機

馬毛島 1

失われゆくもの

米空母艦載機発着訓練の移転候補地として浮上した鹿児島県の馬毛島。大規模な開発工事が進むこの島について、伊藤祐一郎・同県知事は9月、現地調査の意向を示した。地元の漁師らが工事差し止めの訴訟を起こした翌日のことだ。

島の99%を所有しているタストン・エアポート社（旧馬毛島開発）による開発は1999年1月、1通の文書から始まった。国有財産売払通知書。

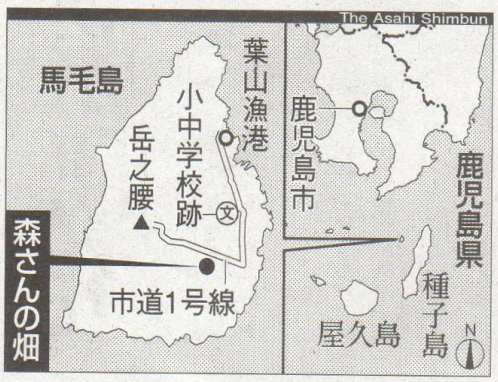


真っ青な海に浮かぶ馬毛島。違法開発の疑いがもたれている＝9月23日、鹿児島県西之表市、本社機から、森下東樹撮影

その5カ月前、同社が県を通して買受申込書を提出していた国有地約14ヘクタールが、1340万円で売られた。

210筆もの土地は、馬毛島の田畑や宅地、保安林の間を縦横に走っていた道路網（一部は水路が並行）で、総延長約6キロの市道3路線を含んでいる。売払通知書に用途は「採石事業用地」と記されていた。

通知書交付の12年前、地元の同県西之表市は、この道路網を無償に近い3405円で取得しかけた。結局、利用計画が立たないとの理由で購入を辞退した。



道路網は、戦後の農地解放に伴い国が整備した「開拓財産」。74年に市に譲与され、80年に無人島になった後は農業利用が無くなり、国に返還されていた。

国有地に戻った道路網は、馬毛島開発が70年代から買収してきた土地を分断し、大規模開発の歯止めになっていた。その売却は、開発を後押しした。

一方、伐採が厳しく制限される保安林は2000年5月、県が同社の申請を受け防風林約45ヘクタールの指定を解除した。魚の繁殖を助ける魚つき保安林は残された。

同年8月以降、同社は砕石やヘリポート設置の名目で林地開発申請と伐採届を重ね、森林伐採を進めた。結果的に、巨大飛行場を目指す開発を行政がアシストしてきた。だが、工事には許可外の開発行為という森林法違反の疑いが出ている。

820ヘクタールの島で未買収の土地は、廃校した小中学校の校舎が立つ市有地、漁師の共有地、神社境内など計約6ヘクタール。唯一の農地が、港と学校跡、島中央の丘を結ぶ市道1号線沿いに残る。

所有者は、東京・秋葉原で会社を経営する森勝幸さん(54)らのきょうだい。馬毛島生まれの森さんらは、島で亡くなった父の遺産である畑を手放すつもりはない。「畑には港から市道を通って行ける。自由に行けるようにしてほしい」と市に要請している。

市道は道路法で認定されるが、同社は農地法によって得た土地の所有権を基に関係者以外の立ち入りを禁じている。（八板俊輔）

◇

沖縄・米軍普天間飛行場返還の日米合意から15年。周囲16キロの馬毛島では石油備蓄基地などの開発構想が浮かんでは消え、今、米軍基地化の動きに揺れる。利用計画が定まらないまま、自然や文化遺産の破壊が進む現状を報告する。

2011.10.5

シカ減少 進まぬ調査

馬毛島 2

失われゆくもの

2011.10.6

馬毛島には野生のシカがいる。ニホンジカより黒っぽく、体が一回り小さい固有亜種マゲシカだ。奈良時代に皮を年貢に納めた記録があり、千年以上も独自の集団を保ってきたらしい。島の最高点の岳之腰（71メートル）から、なだらかに広がる森林と草原に暮らす。

その生息地が今、十字形の「滑走路」工事で無残な姿をさらしている。7月に本社ヘリで上空を飛んだ。ブルドーザーやショベルカー、ダンプカーなど十数台が土地を削り、土砂を運んでいた。マゲシカは、まだ開発が及んでいない南部の草原地帯に集まっている。草は深く食べられ、土が透けて見えるほど短い。

「森が減って餌が不足し、シカと植物のバランスが崩れている。このままでは近い将来、餌不足がひどくなる」。ヘリに同乗した北海道大助教の立澤史郎さん（51）がため息をついた。

保全生態学者の立澤さんがマゲシカの調査を始めたのは1987年。手弁当で3カ月ごとに漁船で島に渡り、廃校になった校舎跡に泊まり込んで個体数を記録した。人間も天敵もいない孤立した環境。増えすぎると栄養状態が悪化して個体数が減り、減りすぎると、また増える。自然の調節メカニズムが働いていた。

固有亜種のマゲシカは、開発が進んだこの10年間に半減した＝7月4日、鹿児島県・馬毛島、本社ヘリから、溝脇正撮影

2000年8月の推定生息数は過去最高の約570頭。その後、上陸調査は行われていない。土地を買い集め、開発に乗り出した馬毛島開発（現タストン・エアポート）が、島内への立ち入りを許さないからだ。

この10年で島の森林は約125ヘクタールが伐採され、半減した。工事の影響で元の植生が失われた土地は、島の半分近い約360ヘクタールに及ぶ。本社ヘリを利用した今年7月の調査では、マゲシカの推定数は約280頭と半減した。生息環境が悪化し、個体数の回復は望めない。植生の復元など保全策をとらなければ、絶滅の恐れが高まると見られる。

マゲシカだけではない。メダカやドジョウが暮らし、シイ類やタブノキの照葉樹林が茂った「椎ノ木谷」も、ほとんどが跡形なく埋め立てられた。葉が細く草丈40センチほどの固有種ホソバアリノトウグサが50年代に見つかった場所も、工事で表土がはがされた。

馬毛島に生息する動植物は、公的な調査がほとんど行われていない。立澤さんは憤る。「実態が分からないまま、なし崩しに破壊していいのか。どんな開発をするにせよ、まず専門家による詳しい現状調査を行うべきだ」

（安田朋起）

濁る海 揺らぐ漁師の絆

馬毛島 3

失われゆくもの

鹿児島県・種子島の漁師の多くは、西に12キロ離れた馬毛島の周辺で漁をする。エンジン船が普及するまでは、手こぎの和舟で海を渡った。5～7月は季節移住で島に拠点を移し、共同でトビウオを取った。

同県西之表市塩泊（あまどまり）の漁師浜田満夫さん(79)がトビウオ漁に加わったのは15歳の時だ。馬毛島では塩泊、洲（す）之崎（のさき）、池田など種子島の浦ごとに、かやぶき小屋が並ぶ「基地」で暮らした。

毎年、浦の世話役「ベンザシ」を選ぶ。ベンザシは深夜1時ごろ「起きれー、起きれー」と小屋を回り、腹ごしらえを終えた頃「行こーろー、行こーろー」と出港を伝えた。彼が、島で一番高い岳之腰（たけのこし）（71メートル）に灯をともすと、漁開始の合図だ。海岸の海藻に産卵したトビウオが沖に出ていくところを狙い、船から広げた網で一網打尽にした。

トッピー（トビウオ）小屋の前で網干し作業をする漁師たち
＝1960年代前後、鹿児島県西之表市馬毛島、平山匡利さん提供

水揚げしたトビウオは浦ごとにまとめ、配分した。鮮魚で売るほか、開いて塩に漬け、天日で干した。テングサ漁の時期になると、女性や子どもも海を渡ってきた。漁師や農家の子がほとんどだった学校は、その時期を休みにした。

トコブシ、イセエビ、カツオ、イカ……。豊かな漁場に恵まれた馬毛島を、漁師たちは「宝の島」と呼んだ。集まるキビナゴを狙って、その下にカツオ、海上には鳥が群がった。

異変の発生は約10年前。馬毛島で開発工事が始まった時期に重なる。海が濁ったと漁師は嘆く。「潜ると5メートル先は見えない。3メートル先さえ見えない所もある」「魚が減った。海底に泥が積もって海藻が生えず、小魚が育たない。小魚を食べる魚も集まらなくなった」

漁師の絆にも、ひびが入った。塩泊集落の正月2日は、大漁と航海安全を願う「船祝い」が恒例だった。公民館に大勢を招き、漁師たちが、魚をきれいに盛った膳を用意した。船祝い歌を、みんなで歌った。

だが、10年ほど前から船祝いは途絶えている。集落の小屋や船着き場があった馬毛島の葉山港周辺の土地の「持ち分」を、集落の代表者らが開発業者に売ったのが発端だ。売却に反対する浜田さんら約20人が入会権を主張し、売買を無効とする裁判を起こしたことで、集落は分裂した。

「馬毛島で魚を取り、子どもを育てた。開発で住民の仲が悪うなった。魚が取れんで収入が減り、生活は奪われていくのに開発は止まらん」と、浜田さんはつぶやいた。（柏原愛）

2011.10.7

戦争・悲恋…苦難の歴史

馬毛島 4

失われゆくもの

2011.10.8

馬毛島には古来、漁業、開拓、牧畜の文化を連ねた歴史がある。

島の北東部に立つ「漁区記」碑は、南海12島の領主種子島氏が朝鮮出兵や海の警防に働いた種子島の浦人に漁業権を与えたと記す。

碑文を著した平山寛蔵は士族で、馬毛島の漁業基地以外を禄地としたが、明治維新で政府に返した。

1994年に84歳で亡くなった郷土史家平山武章さんは寛蔵の孫だ。未出版で「年譜馬毛島異聞」と題した原稿100枚が残る。

1183(寿永2)年から1890(明治23)年に至る種子島家の公式記録「種子島家譜」を軸に馬毛島の歩みをたどっている。

導入部は、第8代島主清時の長子三郎の記録だ。

「人と為り暴悪にして家を嗣ぐの器に非ず、群臣相議し、伴りて馬毛島に田猟するまねして之を弑す」

三郎が17歳で殺されたのは跡継ぎを巡るお家騒動だったとの説が紹介される。

「異聞」は続く。

江戸時代、若いシカの角は貴重な薬とされ、マゲシカを島津家に贈った。ソテツの実は飢饉で「数百千人」の命を救った。屋久島の木材交易を監視する船見番所の設置……。

明治初期には士族が畜産会社「牛牧舎」を設立し、クロマツなど16万本を植樹して放牧した。やがて国による羊の試牧場となり、約500頭を委託管理する。

太平洋戦争では丘の上に海軍のトーチカが建ち、機関銃を備えた。大戦末期、羊は種子島に移され、シカは守備兵に間違えられて米軍機の機銃掃射を受けた。

馬毛島北西部の王籠地域に笠石の載る供養塔群があり、お家騒動の犠牲者として三郎を供養したとの説に沿った挿話をつづる。牧場主の娘と牧童との悲恋物語も記した。

武章さんの長男匡利さん(57)は西之表市で介護施設を経営する。米軍基地化が伝わる中、「異聞」の出版準備を進め「種子島は火縄銃製作など進取の気性が旺盛な土地柄だ。震災被災地の畜産の移転とか、もう一度やり直す方策を考えてもいいのでは」と語る。

馬毛島の99%を有するタストン・エアポート社の掘削開発は、島の南西部にある弥生後期の椎ノ木遺跡にも迫る。埋葬されていた人骨は、縄文人のルーツ研究の貴重な資料とされる。

「異聞」の末尾にこう書いてある。「馬毛島の明日を知るものが、ただ『時』だけであるとすれば、これは余りにも淋しいことであり、私達自身、知恵のなさを後世に恥じなければなりますまい」

(八板俊輔)

=おわり

「牛牧舎」の牧場で飼育される羊=1904年ごろ、鹿児島県西之表市馬毛島、平山匡利さん提供